

音楽科 授業の様子 授業者：志賀 浩介

音楽科では第2学年「テクスチュアに着目して追求しよう」の題材で授業を公開しました。題材のねらいは「テクスチュアを視点に『ふるさと』にふさわしい歌唱表現を創意工夫すること」です。本時は、思いや意図を実際の歌唱で表すことを目指しました。

【前時まで】『ふるさと』のアカペラ合唱版に出会った生徒たちが、その特徴やよさについて意見交換する中で、教師は、そのハーモニーから「深み」や「壮大さ」を感じ取った発言を取り上げ、題材の学習問題「テクスチュアの特徴を生かして、『ふるさと』にふさわしい表現を追求しよう。」を設定しました。各パートの音を取り、テクスチュアの構造について理解を深めた生徒たちは、改めて大事にしたい部分とその表現方法について考える中で、オブリガートなどの役割や、それらのかかわり合いに着目しました。教師は、それらの意見を共有し、題材の学習課題「パート同士のかかわり方に着目して、テクスチュアの特徴が生かされるような歌い方を考えて歌おう。」を据えました。



【導入】教師は、題材の学習問題や学習課題を確認し、「主旋律を広がるように、オブリガートを華やかに歌いたい」や「各パートが活かされるバランスを見つけない」といった生徒の願いを共有し、自分の願いに応じて、個人やペア、グループなどの形態を選択して表現の追求を行うことを確認しました。

【展開】アルトパートのF生は、ソプラノ・アルトパートの生徒数名とグループになり、女声のオブリガートの部分が「華やかに」なるよう追求しました。「華やか」になるような、クレシェンドのかけ方や息遣いが身に付いてきたところで、この部分で主旋律を担当する男声パートとのバランスを考える必要があると気付いたF生は、近くにいた男声パート数名にそのことを提案し、一緒に練習を行いました（写真）。男声との追求を通してF生は、「男声を包み込むようなイメージで深く壮大に」自分たちがクレシェンドすることが大切だと、テクスチュアを生かすための歌い方を見だし、歌唱で表すことができました。



【終末】本時の振り返りでは、F生は「オブリガートのときの、華やかさを意識して歌い進めた。ただ音を大きくするのではなく、主旋律を包み込むように深く、壮大に歌い上げ、音の重なりを意識することができた。『忘れがたき』から、アルト→ソプラノ、男声が合わさっていき、主旋律のバトン渡すように、縦と横の関係の重要性を認識することができた。」とテクスチュアを視点に追求してみte感じたことをまとめていました。

【研究会のまとめ】研究会では、自らの思いや意図をもち、友と共に実際の歌唱で表していこうとする生徒の姿について、肯定的な意見を多くいただきました。さらに授業をよくするために、『ふるさと』という教材を生かすためには、2, 3番についても追求できるような単元展開とし、生徒が自分で追求箇所を選べるようにすることで、より深まりが期待できるという意見をいただきました。また、テクスチュアという要素の知覚だけではなく、その他の要素やそれらの働きから感じられる感受の部分を大事にすべきといった意見をいただきました。生徒がより主体的に学ぶことができるように、授業改善を続けていきたいです。